

<b>Title</b>	教育者としての三谷隆正
<b>Author(s)</b>	村松, 晋
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume24, 2009.3 : 59-83
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3250">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3250</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 教育者としての三谷隆正

村 松 晋

### 1 問題の所在

今日は「教育者としての三谷隆正」という題目でお話をさせていただきます。本日の主題の三谷隆正は、現在それほど知られた人物ではありませんが、その三谷とは対照的に、今なお言及されることの多い南原繁や矢内原忠雄らが、生前、最も信頼を寄せた存在の一人であり、彼ら同様、主として新渡戸稲造と内村鑑三の影響の下で自己形成をなし、近代日本の直面した諸々の問題と、世界観のレベルから根源的に対峙することを得た、類いまれな思想家の一人と目することができます。

「人名事典」風のこうした解説が示唆するように、三谷はまず何よりも、キリスト教信仰に基づいて時代思潮と根底から向き合った、近代日本に稀有な思想家として、我々の前に立ち現れてくる存在です。しかし、そのことをもって三谷を単なる「思索の人」、「書斎の人」と見るならば、それは一面的な見方であるといわなければなりません。と言いますのも、三谷が己の天職として選び取ったのは、旧制高校の教師であり、彼はそこで法哲学や国家論

を講ずるのみならず、教室の外においても求めに応じ、二十歳前後の若き魂と誠実に向き合うことに、終生、使命感を抱き続けた人であつたからです。

この点、あまり注意されていませんが、実は三谷のみならず、南原にしろ矢内原にしろ、そして後述する丸山眞男にしろ、近代日本の「思想家」と称される存在は、おしなべて大学等の「教員」としての顔を持っています。そしてたとえば丸山眞男を囲む「六〇年の会」<sup>③</sup>の存続が象徴するように、「教育者」としてもまた、学生に大きな影響を与え続けた場合が少なくありません。それだけに我々が、そうした思想家をトータルに把握するためには、彼らが残したものを論理的に再構成して事足りりとすることなく、その教育者としてのあり方に着目するというアプローチが、もっと重視されてもよいのではないかと考えている次第です。

## 2 「他者感覚」について——丸山眞男の「遺言」を手がかりに——

そこで今日は、私自身、長年、三谷隆正を論じながらも、これまで試みてこなかった考察、すなわち「教育者としての三谷隆正」に新しくスポットを当て、話を進めていきたいと思います。この点、「三谷先生」として敬愛されたそのありようを、最も的確に表す言葉として、私はここに、先ほど触れた丸山が、恩師である南原繁を評したひと言を紹介することから始めたいと思います。

丸山は自分が研究者を志すにあたり、「南原繁という人格と学問に出会ったというのが大きい」<sup>④</sup>と語っておりますが、彼がその南原を回顧する際に繰り返し触れていることの一つは、実に南原の人格、ことにその「寛容さ」にほかなりません。たとえば彼は、南原没後間もなく編まれた『回想の南原繁』に寄せた一文で、「最大の恩師」南原を

こう評しています。

己を律する厳しさと、他人の他者としての『行き方』にたいする寛容と、この二者が先生の場合のように一個の人格のなかに融合している例に、私は今日まであまり遭遇したことはない(傍点原文)。

「他者として」の部分に、丸山が傍点を振っていることに注意を促したいと思います。この思いは丸山という人間の根幹にかかわることだったのでしよう、彼はこれと同趣旨の事柄を、「最大の恩師」のみならず「最大の畏友」を回顧する文章でも述べています。すなわち「中国の近代と日本の近代」を問いかけることで丸山の眼を啓いた思想家・竹内好を顧みた一文です。そこで彼はこう述べています。

その人なりの立場から一つの決断をした場合には、自分ならばそう行動しないと思っても、その人の行き方を尊重するという原理としての『寛容』をもっていました。……他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解する目です。

南原に対して言われた「他人の他者としての『行き方』に対する寛容」と同様のことが、より具体的に表現されていることに気づかされるはずです。

ただ、ここで注意したいのは、丸山の回想に現れたこれら共通の強調点は、単に南原や竹内という「他人の他者としての『行き方』」に対する寛容」を持った「親しき知己」を失って「残念」だなどという、「個人レベル」の慨嘆に基づくものではないということです。

丸山の教師としての事実上の「遺言」、すなわち「戦後五〇年」にあたる一九九五年も暮れに行われた「丸山ゼミ有志の会」で、彼が教え子たちに言い残したことが、現代日本に蔓延する「他者感覚のなさ」<sup>7)</sup>、「他者との対話が非常に欠乏している」<sup>8)</sup>状況を問い質す言葉であった事実が象徴するように、丸山が「最大の恩師」および「最大の畏

友」を回顧する文章で、それぞれの「他人の他者としての『行き方』にたいする寛容」、「その人なりの立場から一つの決断をした場合には、自分ならばそう行動しないと思っても、その人の行き方を尊重するという原理としての『寛容』」を特記し、その重要性を強調せずにはいられなかったのは、南原や竹内が亡くなった一九七〇年代以来、いよいよ日本がそうした原理の対極の様相を呈しつつあるという、社会的なレベルでの危機意識に根ざすものであったことに注意したいと思います<sup>9)</sup>。

この点は最後にもう一度触れますが、今、この自覚の重要性を確認した上で、あらためて、三谷に師事した人々が、繰り返し述べていることがらに注目してみますと、興味深いことに、そこで描写される「三谷先生」の相貌こそは、丸山が「最大の恩師」および「最大の畏友」を回顧する文章で述べ、さらに世紀末日本への「遺言」としてその必要性をことさらに強調した精神、すなわち「他人の他者としての『行き方』にたいする寛容」、「その人なりの立場から一つの決断をした場合には、自分ならばそう行動しないと思っても、その人の行き方を尊重するという原理としての『寛容』」、まさにそれを体現するあり方であつたことに気づかされるのです。「教育者としての三谷隆正」に肉迫することは、その意味からしても意義深い試みであることを、あらかじめ付言しておきたいと思います。

### 3 「三谷先生」の相貌

以下、「教え子」らによる「教育者としての三谷隆正」の相貌に迫っていきたいと思いますが、三谷を恩師とする一人として、ここではまず、精神科医の神谷美恵子に注目したいと思います。彼女については、近年、「前田美恵子」時代の軌跡に焦点をあてた、まとまった作品が出ましたので、ご存知の方も多いかと思いますが、実は神谷美恵子

が医学を学ぶにあたっては、年齢や健康のこともあり、周囲には反対する意見もありました。そんななか、「終始力づよく励まし」た「数少ない恩人の一人」に数えられる存在が三谷隆正にはかなりませんでした。その「励まし」はどんなものであったのか、彼女は「教育者としての三谷隆正」をこう回想しています。

とくに印象に残っているのは、先生が決して教えをたれるような態度をとられず、いつでも友達のような調子で、こちらの立っている低いところまで降りてきて下さって、若い者としての考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう、とされたことである。……何もかもわかってしまっている、という態度を決してとらず、たえず他者から——たとえばそれが若い人であつても——学ぼうとする人、これこそ真の教育者というものではないか。<sup>⑬</sup>

この描写は、丸山が竹内好について評した「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解」しようとするあり方そのものと言つて過言ではありません。そしてさらにこの一文が意義深いのは、それが「学生」かつ「年下の女性」という、「教員」や「年長の男性」との関係上、原理的に「弱い」立場におかれた他者に示された態度であるという点に尽きています。「いつでも友達のような調子で、こちらの立っている低いところまで降りてきて下さって」という神谷の描写ははからずも、三谷が単に「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解す」べく努めたというのではなく、自分より「弱い」立場、「困難」な立場にある人に対してはことさらに、「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解す」べく努めていたということを照射する回想となつています。

同様の相貌は、同じく三谷に師事した矢内原伊作の一文「三谷隆正先生のこと」に描かれた次の一節からも読み取れます。

お説教めいたことは少しもいわれなかった。むしろにこやかな顔で、こちらの懷疑をそのかすふうのことをいわれることが多かった。それで、父には何もいえなかった私も、三谷先生には何でも相談することができたのだ。理科乙類にいた私が、京大の哲学科に行きたいと思うようになったこと、これを先生の影響だといえないが、その希望をお話ししてご相談申上げたとき、積極的に私の希望に賛成して下さいましたが、その後の私の進路を決定したとはいえる。

矢内原伊作が「三谷先生にはなんでも相談することができた」と述べるのはなぜだろうか。それは三谷が、まさに学生という、自分より「弱い」立場にある他者「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努力していたからにはかならないと思います。ちなみに矢内原の一文に出てくる「父」とは、いうまでもなく矢内原忠雄を指しています。その息子である矢内原伊作は、後に公刊された『若き日の日記』と題された書籍に吐露されているとおり、父の厳格・熱烈なキリスト教教育に次第に批判的になり、悩み苦しんだあげく、その膝下を離れて京都で哲学を学ぼうとするわけですが、それを危惧した父・忠雄が、その親心ゆえに、ひそかに三谷を訪ねて意見を質した際、「今度は僕はとめない」との答えがあったことを矢内原忠雄の日記が伝えています。三谷は父・忠雄とは逆に、矢内原伊作「の希望に賛成し」たのです。

三谷がこう応答し得たのは、何よりも彼が、悩める若き魂を、あくまで「内側から理解」しようとする姿勢を持ち、その上で、たとえ学生とはいえ「その人なりの立場から一つの決断をした場合には、自分ならばそう行動しないと思っても、その人の行き方を尊重するという原理としての『寛容』」を持っていたからだといつてよいと思いますが、ここで焦点となっている「寛容」ということについて、さらに描写を付け加えますと、三谷を追憶する教えず子たちの言葉には、たとえば、「私は自分の信仰問題について、三谷先生からはっきりした指示を受けたことは一度

もなかった。先生はいつも最後の決断は本人にまかせられた<sup>17</sup>という評言に類するものが少なくありませんが、先述の神谷美恵子は、三谷の根幹をなす、信仰をめぐる態度に関して、次のように印象的な言葉を残しています。

私にとって何よりも新鮮だったのは、内村鑑三先生の弟子達の集会がセクト化し、排他的になつて行くのに対し、先生は何にもとらわれないような広い、闊達なところを持ちつづけておられたことであつた。：先生は無教会主義者、教会クリスチャン、カトリック、仏教者、あるいは無宗教者とも広く交流しておられた。それでいてご自身の立場は決してゆるがさず、各種出版物に格調の高い文章を書いておられた<sup>18</sup>。

神谷の回想に付け加えるならば、彼は思想としてのマルクス主義には、その論文で厳しい批判を加えてはおりません。しかし、それを奉じた学生まで拒むようなことは一切なく、この点、文部省の「思想善導運動」にかかわった河合栄次郎などとは一線を画していました。またマルクス主義といえは、三谷は後述するように、結婚後間もなく相次いで妻子を亡くし、以後、長く独身をとおして最晩年に再婚するのですが、その相手は、羽仁五郎の妹であつたことも付言しておきたいと思ひます。このほか、次第にキリスト教への批判を強め、南原繁や矢内原忠雄については、やや辛辣な回想を遺している竹山道雄でさえ、「三谷先生の追憶」と題された格調高い追悼文が象徴するところ、「他人にはけつして洩らさないことまで」三谷には「告白したことがある」ほど信頼を寄せ、没後も終生「先生」と呼び、敬愛の念を寄せた事実は、あらためて想起されてよいでしょう。

こうした描写が描き出す三谷のあり方は、既に練り返し指摘したとおり、丸山が「最大の恩師」および「最大の畏友」を回顧する文章で述べ、さらに世紀末日本への「遺言」として、その必要性をことさらに強調した精神、すなわち「他人の他者としての『行き方』」にたいする寛容、「その人なりの立場から一つの決断をした場合には、自分ならばそう行動しないと思つても、その人の行き方を尊重するという原理としての『寛容』」を具現化したものと



言つてよいと思いますが、三谷にはなぜ、そのようなあり方が可能になったのでしょうか。文字通り「根源的」に、そのゆえんを問うていくことは、単に三谷への理解や、また同様のあり方を現象せしめた南原・竹内への見方を深化させ得るのみならず、丸山の視座に倣つていえば、今、日本に最も求められる精神を、いかにせば復権させうるか、この喫緊の課題を、ほかならぬ私たち一人一人が問うていく営みとして、普遍的な意義を有する試みであることを、今一度強調しておきたいと思います。

#### 4 三谷隆正の「他者感覚」

以下、具体的な考察に入つていききたいと思います。この点、第一に指摘しておきたいことは、三谷が、自分より「弱い」立場にある他者「の立つている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努力していたとは言ひましても、そのことは、彼が自己ならぬ他者という存在について、それは「聞きだ」「せば」「理解」できるのが当然の存在、こちらが「降りて」いきさえすれば、十分に「解釈」できる存在などとして、「楽観視」していたなどということの意味するものではないということです。

むしろ三谷の足跡を内在的にたどつていきますと、彼こそは、自己を他者になんとうに理解してもらふこと、逆に、他者を自己がほんとうに理解していくこと、これらがいかに困難かを骨身にしみて知らされる経験を繰り返すことにより、おそらくは哀しみを味わってきた人であることに気付かされるのです。

といいますのも、三谷は確かに「超弩級」のエリートコース、すなわち第一高等学校から東京帝国大学を卒業し、旧制高校の教授職に就任するという、一見、「順風満帆」な道のりをたどっているわけですが、その歩みは決して傍

目にうつるほど「平坦」なものではなく、むしろそれだけに三谷は、他者にはかりしれない苦しみや哀しみを秘めて生きた人であったということ、したがって、他者の何気ない言動に自己への無理解を感じ得し、言い知れぬ哀しみをひそかに反芻せざるを得ない人だったと言っても過言ではないからです。

ちなみに付言しておきますと、これは三谷に限らず、「他人の他者としての行き方に対する寛容」を持っていた南原、また「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解」しようと努めていた竹内に関しても、当てはまることであつたように思います。実際、南原の『形相』、竹内の『北京日記』等の「作品」をひもときますと、そこには彼らの固有な悲哀や挫折等、「著作以前」の「告白」が込められており、彼ら自身が、他者にははかりしれない苦しみや哀しみを抱え込みつつ生きた人であつたことが言外に、しかしそれだけ深く理解されてくるはずで、ここまでは時間の関係上、三谷の軌跡に限定し、しかも最小限の言及にとどめておきますが、まず明治二十五年、

三谷が三歳のとき、父親の事業が失敗すること、三谷家は破産していることを特記しておきたいと思ひます。その結果、幼き日の三谷は安住の地を終われ、住居を転々とせざるを得なくなつたうえ、十三歳の時には、一家が故郷・京都岩滝村に帰つたために、独り東京に残された三谷には、幼き日の安らぎが、ついに回復されなかつたことにも、あわせて注意を促しておきたいと思ひます。これは思春期の少年にとり、実に重い経験だつたのではないのでしょうか。

ただこの時、東京に残つた甲斐あつてというべきか、三谷は後に「天下の一高」、そして東京帝国大学に進学するという「栄光」を手にはなりますが、しかしこの時、友人のほとんどが、旧制高校特有の寮生活にて青春を謳歌するなかで、三谷は住み込みの家庭教師をしながらの通学を続けざるをえず、旅費の節約を考慮して、ほとんど帰省することもなかつたということ、そしてこの間、肺を患い大学を一年休学し、鎌倉での療養生活を余儀

なくされていたということ、しかもこのとき肺の病は完治せず三谷の宿痾となったこと、これらの意味がその「栄光」の陰で問われなければならないように思います。

こうした一連の経験とそれらが強い感情の総体は、その「華麗」なる経歴ゆえに、とかく想像されにくく、それだけに他者への「解説」がなされ難い、特に未経験の人には心底からの共感を得られにくい、きわめて個人的な領域を、その内面に形成したことと思います。事実、先に触れた竹山道雄は、三谷の没後、こう述懐しています。

その追悼会の演説で、先生が学生時代に住み込みの家庭教師をしていられたことを聞いて、大へんおどろいた。また、その後ときにふれて家庭的にも普通の家並みのこみ入ったこともあらわれるらしいのを仄聞して、意外に思った。<sup>25</sup>

この一文が象徴するように、三谷はみずからの幼少期から青年時代にかけての事情に関し、口にすることはまずありませんでした。それは外聞をはばかってというような浅薄な理由によるものというよりも、自己にとつての決定的な経験は、たやすく口にするには重過ぎるものであり、その重さを他者にほんとうに理解してもらうには、百万言を費やしたと言いきくせるものではない、そもそも各個人に固有の深刻な経験は、たとえ肉親や親友であっても、そう容易く理解しあえるものではないとの自覚、ちやうど丸山眞男が広島で被爆しながらも、「被爆者手帳」を申請せず、また、被爆経験を軽々には語ろうとはしなかったのと、原理的には同様な心情によるものだったと思われま<sup>26</sup>す。

自他の隔絶に対するこうした感覚は、また、彼の周囲に存在した「苦しみの人」や「哀しみの人」との交わりを通じ、ひるがえって三谷自身にもはねかえってきたことと思います。ここでは、そんな彼の身近にいた「哀しみの人」として、三谷を息子のように愛し、また三谷も心から敬愛した姉・三谷民子の存在をあげておきたいと思い

ます。<sup>27)</sup> 彼女は女子学院の教諭として、矢島楯子らとともに名をなした人ですが、その生い立ちはまだに「哀しみ」に彩られたものでした。やはり詳細は省きますが、先の竹山の述懐が暗示するとおり、三谷と民子の間には母親が違ふという事情があること、民子の生母は民子が物心つく頃に亡くなり、その後、彼女は二人の女性を「母」とせねばならなかったこと、また念願のアメリカ留学を、一家の破産によつて急遽中止せざるを得なかったこと、そして生涯を捧げた女子学院でも、教師間の人間関係に疲弊させられる日々をすごしたこと等を指摘しておきたい思います。

三谷はその民子を身近に見て育ち、また終生、独身であつた彼女の面倒を見続けていただけに、その何気ないしぐさや口ぶりに、癒しきれない哀しみの存在を見透かすことも多々あつたに相違ありません。その経験は、姉と弟という理解しあつた親しい間柄でありながら、自己が入りこむ余地のない民子固有の世界、いいかえれば、安易な同一化や同情をはねかえす、他者固有の領域の存在を痛感させるものだったと思われまふ。

こうした事情が示唆するように、三谷は他者を理解すること、自己を他者に理解してもらうことに樂觀的な見通しを抱けるどころか、むしろその困難性を痛感してきた苦しみの人・哀しみの人でした。にもかかわらず、三谷が自他の隔絶に居直つて自閉するような態度をとらず、他者「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努力することができたのはなぜなのでしょうか。

この点、三谷の自覚を付度しつつ述べるなら、他者理解が難しいことを痛感している「にもかかわらず」、他者「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努力したという言い方は実は正確ではなくて、むしろ、他者理解が困難「だからこそ」、他者「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努め続けたという方が、三谷の

真意を示すものになると思うのです。これは先に付言した二人、すなわち「他人の他者としての行き方に対する寛容」を持つていた南原、また「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解」しようと努めていた竹内についても言える「逆説」であるように思います。

すなわち、その内面的な連関をより敷衍していかなければ、他者を理解すること、逆に自己を他者に理解してもらうことは困難だという自覚が極まるとき、逆に、「だからこそ」、私たちは印象や思い込みに基づいて他者を一方的に裁断したり、あるいは他者の考えを自己が「代弁」できるなどと思いつたりすることを自戒しなければならず、また、たとえ肉親や親友であっても、その人固有の苦しみや哀しみをほんとうに理解することは難しいからこそ、なおのこと他者「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努力しようという、他者への逆説的な促しが育かれたことと思われるからです。

さらにいうならこの促しは、三谷自身が病身であり、そのひそかな苦しみが理解されないことからくるもどかしさや失望等、他者の無理解に基づく哀しみを、おそらくは再三味わった人であればこそ、同じ他者でもことさらに自分より「恵まれない境遇」や「つらい立場」にある他者に向け、より積極的かつ鋭敏に発揮されることになったように思われます。三谷が教育者として、原理的に自分より「弱い」立場にある他者、すなわち個々の学生に「決して教えをたれるような態度をとら」ず、「いつでも友達のような調子で、こちらの立っている低いところまで降りてき」て、「若い者としての考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう、と」努めたこと、またその他にも病の床にある人、家族を失い悲嘆にくれる人等、「苦しみの人」や「哀しみの人」を慮った文章や手紙が極めて多く残されていることは、上記の読みを証しする事実であるように思います。

しかしながら、南原や竹内、そして何よりも三谷が生涯、「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理

解す」べく努めることができたその理由を、他者理解の困難性に基づいた、逆説的な促しにのみ帰することには問題が残るように思います。といいますのも、「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解」しようとすることは、率直に言つて、非常に根拠があることだからです。特に、教育者として、学生を一人として見限ることなく、性格や置かれた状況を考慮して個別的に向き合うこと、場合によつては、己に批判の矢を向ける者とも辛抱強く対話していくことは、いつ果てるとも知れない困難な営みとして、単なる「知性の命令」や、「人間的努力」によつて継続できるものではないと思います。

この点、丸山眞男の初期の教え子である石田雄氏は、先に触れた丸山の「遺言」を、「永久革命としての民主主義」という考え方に重ね、「永遠の課題としての他者感覚<sup>⑨</sup>」と表現しておられます。その必要性・重要性は、先にも触れたとおり非常によくわかるものですが、しかし、「永遠の課題」と容易く言われるものの、その無限の課題を遂行する「力」を、私たちはいったどこから獲得すればよいのか、さらに突き詰める必要があるように思います。二〇〇四年八月十五日における「復初の集い」で語られたご講演そのものとあわせ、氏の提言には共鳴させられるところが多く、今日の話を組み立てるうえでも大きな示唆を与えられましたが、実践的な関心から読み直すとき、僭越ながら物足りなさを覚えるをえません。あらためて問いますが、いったい三谷はなぜ生涯にわたり、他者「の」立っている低いところまで降りて「いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努めることができたのでしょうか。この問題こそ「問題」であるだけに、本来ならば三谷のみならず、彼同様、「他人の他者としての行き方に対する寛容」を持っていた南原、また「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解」しようとする竹内に関し、その持続力の基を解析する必要がありますが、今日は三谷に焦点を絞って議論を掘り下げることにより、今後、彼らの根幹に迫りゆくためにも「有効」となりうるような、「精神の場」を築くこと

に傾注してみたいと考えます。

## 5 自他認識の転換——意味付与の主体は誰か——

この点、私なりの結論を先取りして言うならば、三谷の眼には、いかなる人も見棄てられてはならない、人間に値する扱いをされなくてはならないという強い確信が息づいていました。その確信は、いうまでもなく三谷の「独り合点」によるものでなく、信仰に基礎付けられたもの、すなわち「神はその独り子を世にたまうほどに人間を愛された」というキリスト教信仰に裏打ちされたものでした。この信仰について、さらに敷衍するというならば、そもそも人間の価値を決めるのは、世間でも、国家でも、もちろんこの私でもない、究極的に神であり、その神の目から見れば、どんな人でもかけがえのない価値がある、だからこそ、誰一人、見棄てられてはならない。教育者としての三谷隆正は、たえずこの信仰と、この信仰に裏打ちされた人間への確信に立ち返ることで、終生、学生一人一人と辛抱強く向き合い続けたのだと私は理解しています。

「人間を価値づけるのは、世間でも、国家でも、もちろんこの私でもなく、究極的に神である」——この信仰は、クリスチャンにとつて、「格別」のものではありません。しかし三谷の場合、この信仰は、一つの決定的な経験を媒介とすることにより、存在そのものに刻印されたもの、いわばその精神を眠らせない「痛覚」にまで化している点<sup>①</sup>が、著しい特質をなしているように思います。その決定的な経験こそは妻子との相次ぐ死別です。

実は三谷は三十四歳のとき結婚したものの、その一年後に生まれた娘を、生後三週間で亡くし、さらに娘の出産後、ほどなくして寝込んだ妻も、その四カ月後に喪うという悲劇に直面しています。三谷はこの時、自身も寝込んだ

でいたために、妻の最期を看取ることができなかったばかりか、亡骸が運び出されていく際も、病床から目送するしかありませんでした。その経験は、妹への手紙のなかで「血涙骨髓より湧く」<sup>②</sup>という強い言葉で表現されているとおり、三谷の人生で、最もつらく決定的な出来事であったと思われる。

しかし三谷はこの悲劇の渦中において、悲しみにうちのめされるのみならず、まさに今問題になっている人間の価値、人間の存在意義につき、主として二つのことを深刻に問い、かつ、その眼を新たにしように思われます。一つは、生後間もなく亡くなった娘への、その価値への問いかけです。たった三週間でこの世を去った娘、あの子は、いったい何のために生まれてきたのか。その存在意義は、いうまでもなく、一般的、現実的な尺度では推し量ることができません。三谷は娘の生と死を思うたび、人間を価値づけるものは究極において何なのか、深刻な自問を繰り返したと思われます。

もう一つはより根源的な問題で、三谷にとつての自己の価値、自己の存在意義にかかわる問いかけです。おそらく彼は、妻子との死別に根ざす哀しみのどん底で、己を厳しく責めたことと思います。事実、三谷は、ある教えるに宛て娘を死なせたこととして、「小さな生命に対して十分に尽くし得なかったことを細々と書き綴つてき」<sup>③</sup>たそうですが、悔やむ思いは娘のみならず、何よりも妻に対して向けられたように想像されてなりません。

すなわち、妻は子どもを生まなければ生きられたのではないか、孤独に事切れるような最期を迎えさせてしまつたのは、何といつても、夫である自分の責任ではないか。悔やんでも詮無きこととはいえ、おそらく三谷には、強烈な自責の念が湧き起こってきたと思われる。

こうした思いそれだけでも、自己の価値への自負心を喪失させるに十分ですが、私はさらに、三谷は別の問題でも苦しめられたと思つています。三谷も「人間」であることに変わりありません。「なぜ自分だけがこんな目に」と



憤るあまり、「順風満帆」に見える人やその家族に対し、いわれなき「嫉妬心」を抱いたことがなかったとは誰も断言できません。やり場のない怒りを、無意識のうちに出してしまったということも皆無ではなかったでしょう。いづれも「クリスチャン」らしくらぬ心のありようではありますが、しかしそれだけに、それら赤裸々な心のありようは、三週間でみまかった娘の存在意義を問うどころか、それ以前にそんな自分の存在意義、その自負心を大きく揺さぶる契機になったように思われます。

実際、三谷は妻子との死別の後に書かれた「問題の所在」という一文のなかで「精神的なる破産の苦しみは、唯物的なる破産の苦しみに百倍千倍する苦しみであります」と書いたあと、その内実を敷衍して次のように述べています。

自分も多少の信念は有つてゐた筈だ。信仰もあつたつもりである。然るに此ざまは何たることか。噫、自分の信念、自分の信仰、それらはかくも力ないものであつたのか。自分はこれほど弱く又愚かなものであつたのか。さう悟つて我と我がいたましき姿をかへりみる時、我等の悲みいたみは言語を絶します。

そこに直接の原因は記されてはいませんが、私はこの「告白」こそ、三谷が悲劇のどん底で直面させられた、自己の価値への自負心の、無残な破綻の状況を、ひそかに描きだしたものののではないかと考えています。その描写が示すところは完全なる絶望です。三谷はここで、実存的には「とどめ」を刺されているように思います。

しかしながら注意したいのは、三谷の先の「告白」が、自己への絶望では終わっていないという点です。三谷は右の「告白」にすぐ続け、次のように述べています。

然し幸福なるは斯る痛苦の時です。打ちのめされてくづほれきつたる心であります。その貧しさの極みなる心であります。その時その心は真直にイエスを見上げて、無条件に彼にすることができます。

三谷はここで贖罪の事実について言及していますが、キリスト教信仰の核心であるこの問題を、彼が明確に説き始めるのは、実は妻子との死別以降のことにほかなりません<sup>(7)</sup>。この事実は、先の引用が証拠立てているように、三谷が悲嘆と失意のどん底で、いかなる転換を成し遂げたかを語りかけているように思います。

すなわち、悲嘆と失意のどん底にあった三谷は、胸奥深く、こう言わしめられたのではないでしょう。すなわち、こんな自分のためにも、否、こんな自分のためにこそ、神はその独り子を犠牲にしてくださいのだ、と。この厳肅な恩恵の事実には、三谷はあらためて開眼することにより、失われた自己の価値、存在意義というものを新たに与えなおす契機を得たのだと思います。自分は確かに惨めな存在である、しかしそんな自分を価値づけるのは、世間でも、国家でもない、究極において神なのだという、神だけは認めてくださるのだという、ゆるぎなき確信への到達です。

これだけでも比類なき転回といえますが、私たちの関心の上からは、より一層注意を促しておきたいことがあります。すなわち、三谷におけるそうした自己認識の転回は、自己の価値、自己の存在意義のみならず、自己以外の人間の価値、他者の存在意義に関しても、そのまなざしを一新させる経験ともなっている点にほかなりません。たとえば三谷は、その名も「私は何故神を信ずるか」という文章のなかで、次のように述べています。昭和六年という時代相応のやや硬い表現で、しかも長くなりますが引用してみます。

自分一身に關しての斯の神信頼は然し、おのづから自分以外の存在についても、神が自分に向けたまふと同じ眞実を之に向けたまふに相違ないことを信頼せしめる。そのとき人類と万有とに關する神の深切なる摂理を信せざらんとすとも得ない。私一個に對してさへ斯くまでに眞実でありたまふ神が、万物に對し、全人類に關して、無関心不忠実であり得たまふ筈がない。人類の歴史は神の限りなき眞実に守られて、誠実眞摯なる摂理

がそれを一貫して居るに相違ない。<sup>88</sup>

難しい言い回しではありますが、ここで三谷がおうとしていることは明白です。すなわち、こんな「私一個に對してさへ」、神はその独り子を犠牲にされるほどの真実を示してください。いわんや「自分以外の存在」對してはなおさらだ。どんな人にも、それぞれに、神はかけがえのない価値、かけがえのない存在意義を認めておられる、たとえ三週間でみまかつたみどり児といえども。

このように三谷は、「こんな自分のためにも神は独り子を犠牲にされたのだ」という恩恵の事実の上に、人間を見るためのゆるぎなき原点を置くことにより、自己の価値のみならず、他者の価値、その存在意義をあらためて確認することになったように思います。それは父親として、亡き娘への思いを新たにするのみならず、何よりも教育者として、眼前の学生、その一人一人を見る眼を変える経験になったに相違ありません。すなわち先の問いに戻っていうならば、なぜ三谷は生涯にわたり、他者「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだ」すべく、粘り強く努め続けることができたのか。それは三谷が人間を価値づけるものについて、その根拠を神の目線、具体的には、自己にとつての贖罪の事実に求めたからだということができるようになります。この事実により恃むとき、そもそも人間の価値を決めるのは、世間でも、国家でも、もちろんこの私でもない、究極的に神にほかなりません。その神の目から見れば、どんな人でもかけがえのない価値がある、だからこそ、誰一人、見棄てられてはならない。「教育者としての三谷隆正」は、たえずこの信仰に立ち返ることに、より、終生、学生一人一人と辛抱強く向き合い続けた、粘り強く彼ら「の立っている低いところまで降りて」いき、その「考え方や生活について、なるべく多くを聞きだそう」と努力し続けることができたのだと、私はこう結論付けたいと思います。

無論こうした「結論」は、三谷の軌跡と言説に即して考察するなかで初めて導出し得るものであり、それをもつて南原や竹内における「持続力」の基まで解釈する「越権」は戒めなければなりません。ましてこうした「結論」ゆえに、「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解す」べく努め続ける生き方は「宗教的信仰」なしには不可能だなどと決め付けるとしたら、それは一種の「排除の論理」にほかならないでしょう。<sup>39</sup> そもそも竹内や丸山は、ある特定の信仰を持った人ではありませんでしたから、そうした見方自体が成り立たないのは自明です。しかしながら、そのことを認めたくらんで、なお強調しておきたいことがあります。それは、南原や竹内、さらには丸山も含めて、生涯にわたって「他者感覚」を持続せしめた人々にはおしなべて、三谷同様の「痛覚」、すなわちその精神を眠らせない、ある「痛み」を伴った記憶が射込まれており、その記憶に基く精神の転回が、かの「持続」の基となっていたであろうということです。「理性」や「理屈」を超えた、その意味で「信仰」に通ずる内面世界が彼らのどこかにあつたであろうということです。人間の持続的な行動、やむにやまれぬ行動の根底には、「理性」や「理屈」を超えた、「促し」の基が必ずあるということもまた真実であると思ひます。これは人間の精神と行動を考へるうえで外せない視座であると思われますだけに、「蛇足」を承知で、あえて付言しておくこととします。

## 6 おわりに——学問的作品との内在的連関——

以上、「教育者としての三谷隆正」の相貌と、その根底にある世界について述べてきましたが、最後にそうした世界が三谷の作品、なかならず彼の専攻した法哲学や国家論に、いかなるかたちで反映させられているか、簡単に触れることで終わりにしたいと思います。まず注目したいのは、三谷がその法哲学や国家論において、立論の前提と

してすえた「相生相活<sup>④</sup>」という言葉です。聴きなれない言葉と思いますが、その意味するところを三谷自身の言葉で述べますと、「人々互に自他を人間として相尊びつつ生活すること」<sup>①</sup>となります。「相生相活」といい、「人々互に自他を人間として相尊びつつ生活すること」といい、学術論文の文脈で語られているだけに、ストレートには出されていませんが、そこには明らかに「教育者としての三谷隆正」を規定した確信、すなわち「いかなる人も見棄てられてはならない、人間に値する扱いをされなくてはならない」という揺るぎなき確信が反映されています。

さらにこの確信は、三谷法哲学や国家論の前提を超えて、内容それ自体に色濃く浸透していることに気づかれます。ここでその内容をかなり簡略化して述べますと、三谷はまず法というものを、「相生相活」「人々互に自他を人間として相尊びつつ生活すること」を具体化するために、人間が自覚的に生き営むべき制度的ルールとなし、また国家というものを、そうした制度的ルールを担保・保障する存在として位置づけました。すなわち三谷は、人間の社会生活を具体的に実現するうえで、法と国家を必要とは思ななかつたわけですが、しかしそのことは、三谷が国家というものを、至上の価値としたことを意味するものでは勿論なく、むしろ三谷は二つの点で、法と国家が則るべき原理を力説しています<sup>②</sup>。それはまず第一に、法が規制できるのは人間の外面生活、すなわち生活条件にかかわる部分のみであり、その生活の内容、特に個々の精神生活とその自由にまで介入することは絶対に許されないということ、第二に、この原理ともかかわることですが、三谷において法と国家は、人間が自覚的に生き営むべき必要存在である以上、それは当然、当の人間が従うべき普遍妥当の規範の規制下に置かれねばならない、言い換えるなら国家というものは、権力というものは、道徳に優越してはならないということでした。いずれも国家という至上の力を規制しようとするものですが、先にも述べたとおり、「教育者としての三谷隆正」における、その他者認識を規定した世界は、三谷国家論を貫くこの要請にこそ表れているように思います。

といひますのも、人間を価値づけるのは究極において神であるという視点に徹するとき、人間の精神生活を国家が指示するということは、何が価値を持ち何が無価値であるかを国家が指図すること、具体的には各人の思想の自由を侵すこととして、到底容認できるものとはなりません。同様に、国家を縛る普遍妥当の規範を考えないということは、本来、「人々互に自他を人間として相尊びつつ生活すること」を具体化すべく構想された国家が、いつしかそれ自身目的化されることにより、ついには、人間というかけがえのない存在を、国家の手段と見なしていく道を開くものとして、こちらも断固、拒否されるべきは明白なことです。このように関連付けて考えていきますと、「教育者としての三谷隆正」における、その他者認識を規定した世界、すなわち人間を価値づけるのは、世間でも、国家でもなく、究極において神であるという確信は、三谷法哲学そして国家論の内容にこそ明確に活かされているといつてよいように思います。

翻つて現代という時代を凝視してみますと、私たちが直面しているこの日本社会は、当の丸山が最晩年に憂えたとおり、甚だしく「他者感覚」を喪失した世界、すなわち自分より困難な立場にある「ひとの身」になつて考えてみるという、ごくまっとうな促しすら感じなくなっている、それどころか、一握りの「強者」や「勝者」の陰で涙を流す、弱き者、貧しき者、苦しむ者を、「邪魔者」として見棄て、切り捨てていく世界になりつつあることは、丸山のいわば「予言」どおりといつて過言ではありません。それだけに、この殺伐たる社会において、今、喫緊の課題となることは、「いかなる人間も見棄てられてはならない」「切り捨てられてはならない」という、まさに語の厳密な意味において「人間を守る」視点を、いかに確立するかという問題だと思ひます。

このことに思ひ至るとき、生涯、「他者をあくまで他者として、しかも他者の内側から理解す」べく努め続けた「教育者としての三谷隆正」のあり方は、同じく教育者である私たち一人一人に、また現代日本で生きる私たち一

人一人に、きわめて深い問いかけを投げかけているように思います。これこそ「教育者としての三谷隆正」から、現代に生きる私たちに贈られた最大のメッセージであるように思います。このことを最後に強調することで今日の講演を閉じさせていただきたいと思います。大変急ぎ足で、しかも雑駁な話ではありましたが、ご清聴に心より感謝いたします。

（二〇〇七年十月二十四日 「キリスト教と諸学」の会における講演）

# 注

- (1) 三谷の生涯とその時々における南原繁、そして矢内原忠雄との関係に関しては拙著『三谷隆正の研究——信仰・国家・歴史——』（刀水書房、二〇〇一年）を参照のこと。
- (2) 三谷の「教育者」としての「使命感」に関しては、南原繁、丸山眞男、前田陽一、長清子による座談会「三谷隆正先生の人と思想」（『図書』、岩波書店、昭和四十年九月）「南原他編『三谷隆正——人・思想・信仰——』」、岩波書店、昭和四十一年、二二二～二二三、二二〇頁。以下、本書からの引用に際しては『三谷』と略記）を参照のこと。
- (3) 「六〇年の会」は、丸山による東京大学法学部「東洋政治思想史」講義を、一九六〇年度に聴講した学生の有志による会である。高木博義「六〇年の会と雑誌『60』（『丸山眞男集』第十三巻、岩波書店、一九九六年、『月報』13）、ならびに同『丸山眞男先生と「六〇年の会」——会の特質を析出するひとつの試み』（私家版、二〇〇一年）を参照のこと。
- (4) 丸山眞男「夜店と本店と」、『図書』、岩波書店、一九九五年七月号（『丸山眞男座談』第九巻、岩波書店、一九九八年、二九〇頁）。
- (5) 同右「断想」、丸山他編『回想の南原繁』、岩波書店、一九七五年（『丸山眞男集』第十巻、岩波書店、一九九六年、一六五頁）。
- (6) 同右「好さんとのつきあい」、『追悼 竹内好』、一九七八年（『丸山眞男集』第十巻、三五八頁）。
- (7) 同右「丸山ゼミ有志の会」懇談会スピーチ」（『丸山眞男手帖』24、丸山眞男手帖の会、二〇〇三年一月号、四三頁）。

- (8) 同右。
- (9) 「石油ショック」(一九七三年)前後を境に、同様の時代認識を持った一人として、藤田省三の名をあげることができる。その「絶望」(藤田「戦後精神史序説」、『世界』、岩波書店、一九九八年五月)の詳細に関しては、飯田泰三「藤田省三の時代と思想」(『現代思想 特集』藤田省三、青土社、二〇〇四年二月号「同『戦後精神の光芒 丸山眞男と藤田省三を読むために』、みすず書房、二〇〇六年」)を参照のこと。
- (10) たとえば太田雄三『喪失からの出発』(岩波書店、二〇〇一年)など。
- (11) 神谷美恵子「三谷先生との出会い」(『三谷』、一五九頁)。
- (12) 同右。
- (13) 同右(前掲『三谷』、一六〇頁)。
- (14) 矢内原伊作「三谷先生のこと」(同右、一七一頁)。
- (15) 同右『若き日の日記』(現代評論社、一九七四年)。
- (16) 矢内原忠雄、昭和十二年十一月一日の日記(『矢内原忠雄全集』第二十八巻、岩波書店、一九六五年、七三九頁)。
- (17) 諏訪望「三谷先生の残されたもの」(『三谷』、一八七頁)。
- (18) 神谷美恵子「らいとの出会い」(『神谷美恵子著作集9 遍歴』、みすず書房、一九八〇年、八三頁)。ちなみに神谷の母方の叔父は「無教会」の「独立伝道者」としても知られる金澤常雄であった。金澤についての文献は多くないが、差し当たり山田隆也「金沢常雄」(藤田若雄編著『内村鑑三を継承した人々』下巻、木鐸社、一九七七年)を参照のこと。
- (19) この再婚に込められた三谷の歴史認識および信仰に基づく使命感に関しては、前掲拙著第四章「破局のかたに」、および終章「三谷隆正の求心力」を参照。また三谷(森)豊子「思い出」(『三谷』)も参照のこと。
- (20) 竹山が矢内原について述べた文章としては「矢内原さんの私が接した面」(『矢内原忠雄全集』月報、岩波書店、昭和三十九年十二月)『竹山道雄著作集4 樅の木と薔薇』、福武書店、昭和五十八年)、南原については「一つの秘話」(『教養学部報』、昭和五十五年二月十八日「同右」)がある。いずれも、「大学人」として敗戦直後の二人に接した竹山の眼による、やや「辛め」の描写が興味深い。



(21) 竹山道雄「三谷先生の追憶」(『三谷』、四〇九頁)。

(22) 同右。

(23) 南原の人生における様々な「悲哀」に関しては、『形相』所収の歌それ自体が語りかけているが、その具体的な様相に關しては、伝記的記述も多い加藤節『南原繁』(岩波書店、一九九七年)が示唆に富む。同じく、若き日の竹内が深刻な「挫折」や「放蕩」、そして「絶望」を経験し、そこから逆説的な再生をなし得た「精神の劇」について、恐らくは最初に言及した文章として丸山「竹内日記を読む」(『ちくま』、一九八二年九月号『丸山眞男集』第十二卷、岩波書店、一九九六年)を参照のこと。彼らのそうした「語られざる」精神史は、本文でも三谷に即して詳述したとおり、その他者認識の基盤となつたように思われる。

(24) 三谷の伝記的な事実に關しては前掲拙著を参照のこと。

(25) 竹山道雄「三谷先生の追憶」(『三谷』、四〇四〜四〇五頁)。

(26) 「被爆体験」をめぐる丸山の重い感情については、丸山「二十四年目に語る被爆体験」(『丸山眞男手帖』6、丸山眞男手帖の会、一九九八年七月号)、また「丸山眞男往復書簡——原爆体験をめぐつて——」(同右)を参照のこと。

(27) 三谷民子の生涯に關しては、前掲拙著、特にその一章「永遠への希求」を参照のこと。

(28) 「哀しみの人」「苦しみの人」を慮つた三谷の文章に關しては、『全集』第五卷「信仰と生活」に収録された幾多の追憶文ならびに書簡を参照のこと。

(29) 石田雄「丸山眞男との未完の對話を持統するために——『他者感覚』の意味を中心に」(同『丸山眞男との對話』、みすず書房、二〇〇五年、二五〜二六頁)。本稿は石田氏のこの文章に多大な示唆を受けた。

(30) 前掲(28)と同名の講演が、その内容を圧縮した形で、二〇〇四年八月十五日の第五回「復初の集い」で行われている。その内容は『丸山眞男手帖』31(二〇〇四年十月)に掲載されている。

(31) 前掲拙著三章1「死の蔭の谷を歩むとも」を参照のこと。

(32) 大正十三年八月二十七日、川西実三・田鶴子宛書簡(『三谷隆正全集』第五卷、岩波書店、昭和四十一年、四四〇頁、以下、本全集からの引用に際しては『全集』と略記)。

(33) 守谷英次「恩師三谷先生」(『三谷』、一五五頁)。

- (34) 三谷「問題の所在」、『問題の所在』、一粒社、昭和四年（『全集』第一巻、二二一頁）。
- (35) 同右（同右、二二一～二二二頁）。
- (36) 同右（同右、二二二頁）。
- (37) 片山徹「三谷隆正先生の岡山時代」（『三谷』、一五一頁）。また三谷自身、ある書簡の中で「キリストの贖罪というような事、キリストが神の独り子である」と※引用者注「という意味はどういうことか、それらの事は僕にもまだよく判りません。：しかしもしそういう種類の事が説であり狭義であつて、我々が之を実践し体験し得る事でないのなら、それらの事が終に判らずに終つても敢て遺憾とする必要ないと考えています。信仰の根底はその根本に於て道徳的要求以外のものでない筈だと僕は考えていますから」（大正八年十二月二十七日、三谷文子宛書簡「三谷隆正の生と死」、新地書房、一九九〇年、六九頁。なお本書で「書簡」は「現代仮名遣い」に直されているので、引用はそのままとした。）と述べているのは、その若き日における信仰理解を表すものとして興味深い。
- (38) 三谷「私は何故神を信ずるか」、基督教女子青年会日本同盟宗教部編纂『私は何故神を信ずるか』、昭和六年十一月（『全集』第五巻、一六二頁）。
- (39) 思想史研究における「排除の論理」の危険性と、「理解の論理」の必要性を強調した論考として半澤孝麿『ヨーロッパ思想史のなかの自由』（創文社、二〇〇六年、特に二六～二八頁）。
- (40) 「相生相活」は、三谷の国家論・法哲学のキータームであり、特に国家論としての処女作『国家哲学』（日本評論社、昭和四年『全集』第三巻）の随所に散見される。いわゆる「黄金律」を、社会科学の文脈において換言したものと考えられる。
- (41) 伊藤正巳他編『法と国家』、近藤書店、昭和二十四年（『全集』第三巻、三六一頁）。本書は、三谷の没後、彼の教えを受けた人々が編纂した書物で、個別論文のほか、第一高等学校での「法制通論の講義」（『法と国家』編者後記、「同右、六三七頁」）を収めている。
- (42) 一九二〇～一九三〇年代の時代思潮をふまえ、三谷国家論の歴史的な意義を明らかにした論考として前掲拙著二章「時代への召命意識」を参照のこと。